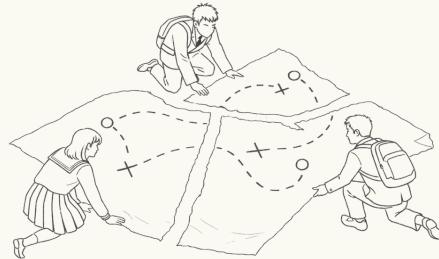


これからの授業のあり方を探る

デジタル・シティズンシップ・シティという実践

広島大学 草原和博先生の実践から学ぶこと



序列化を乗り越える授業

現在の学校では、子どもたちが重層化した構造の中に押し込まれている。前回の「Ed.ベンだより（71号）」でお伝えしたように、早い段階から「知的学級」「情緒学級」「不登校学級」などに分けられ、明らかに序列化されているといえる。しかもその分けられる要因は「その子どもの中」にあると、学校現場では考えられているのである。もちろん序列と言われることはなく、「個別最適」な「その子にあった」教育環境を提供すると表現されている。しかし、このシステムが本当に子どもたちの成長を促しているとはなかなか考えにくい。子どもたちのためにも、このこと自体を根本的に問い合わせなければならない時にきているのではないだろうか。もちろんこうした教室間の重層化だけでなく、普通教室の中でも「重層化」や「序列化」は進んでいる。リーダーのもとに整然と取り組む様々な学校行事。まとまって取り組むことの素晴らしさばかりが強調され、協力を半強制的に求められることになる。友達関係でも勉強ができるかできないかで、明らかに序列が出来上がる。

それではこうした状況を理解したうえで、どのような取り組みが必要なのであろうか。子どもたちが出会っている教室の重層化や序列化から、少しでも開放される授業や活動を具

体的に作り上げなければならない時にきているのである。

しかしこのことは決して生易しいことではない。年間計画が決まっている教科活動の枠内でチャレンジするのも難しい。それでは、「総合的な学習の時間」であればどうだろう。工夫の余地はまだ残されているのではないだろうか。

そんなことを考えている折、可能性を秘めた実践報告に出会い、目が覚めた思いがした。それは社会科の授業である。その実践報告は、12月14日（日）に行われたEd.ベンチャーの「インクルーシブな社会を目指す学習会」でおこなわれた。報告者は、広島大学の草原和博教授。東広島市の小学校をベースとして、教育委員会とも協同して展開している取り組みである。以下はその報告である。実践研究のテーマは、「新しい公教育としてのデジタル・シティズンシップ・シティの取り組み」である。先生は、東広島市の小学校をベースに、九州や北海道の小学校の教室をデジタルでつなげ、社会科の授業で、新しい公共的課題について、デジタル空間の中で参加している子どもたちみんなが、一緒に学び考える取り組みを進めている。

デジタルで教室の壁を越える

インクルーシブの観点での特徴は、学校に来られない子どもが自宅からでも、または過疎地域の学校においては、一人学級で学んでいる子どもも、それぞれが自分のペースでデジタル空間に参加できるよう配慮されていることである。

また草原先生が進めているこの学びのデジタル空間には、いくつかの特徴がある。一つは、環境の違ういくつもの学校が同じ空間で学び合うことができること。環境の違いを、逆に相互の学びの深さにつなげているのだ。また、もうひとつは、様々な立場の「地元の市民」が参加していること。学習の課題によっては、「市議会議長」の方まで登場したことには驚かされた。

さらに最大の特徴だと感じたのは、学習のテーマとして取り上げる「公共的課題」が、今まであまり学校教育が積極的に取り上げなかつたようなテーマを正面に据えていることだ。

例えば、「交番をどのように配置したら効果的か」という公共的テーマについて、過疎地の子どもたちと人口密集地域の子どもたちが話し合いをする。過疎地の子どもたちからは、人口密集地域にはきっと様々なことがあり、交番を必要とする頻度が高いのではないか？だから、人口に応じて交番を配置したらどうだろうか、という意見が出る。それに対して、人口密集地域の方からは、過疎地域で交番が少なければ、それこそ何かあっても交番に相談にいけない。人口密集地域では、数が少なくてても距離が近いから何かあっても行くことができる。このことからは、過疎地域にこそ交番を増やすべきだ、という意見が上がる。そして、参加している子どもたちが、自分が生活している地域を背景とした様々な意見を出し合うのだ。

もう一つ例を挙げる。取り上げた地域では、先見性のもと苦労しながらも灌漑用水を引いた歴史がある。この歴史を記念して石碑を建てることになったが、さて誰の名を石碑に刻むべきかを子どもたちに問う授業である。灌漑用水を引こう

点数化にできない「学び・成長」

「自分事」として社会を語り合う子どもたち

と言い出した人がふさわしいのか？

しかし実際には、土地を提供した人がいたからできたのではないか？もっと言えば、実際には苦労の連続で工事をし、体を張って水路を引いた人たちがいる中で、たたえるべきは誰なのか？石碑に刻む名前をめぐって、様々な角度からの意見がデジタル空間で飛び交う。こうした子どもたちの議論の中に、地元の大人たちも入ってくるのだ。

実践報告を聞いていて、一番に感動したのが、先生が提案する公共的課題の奥の深さであった。そして、こうした公共課題

を子どもたちが「自分事」として話し合う姿に驚かされた。

こうした「公共的な問いかけ」を、異なる環境や地域にいる子どもたちが話し合う「デジタル・シティズンシップ・シティ」には、今までになかった可能性が生まれていることに気づかされた。すべての子どもたちが参加可能であり、学びや活動が点数化されることはない。そして、子どもたちは、お互いの関係性の中で学び、成長していくのである。そんなところに、この実践の素晴らしさがあるように思った。

Ed.ベンチャー教育講演会2026



【講師】桜井智恵子

関西学院大学
人間福祉研究科教授

専門は教育・社会学・思想史。主な著書「教育は社会をどう変えたのか——個人化がもたらすリベラリズムの暴力」「ポンコツでいこう——反開発主義による社会の再生産」

現在の学校教育のあり方を問う

— 私たちは「自発的隸従」から逃れられるのか

戦後にはじまった民主教育は、経済成長の中で、産業界が求める人材育成機関へと変貌してしまいました。それぞれの時代の中で、学校は、技術開発に寄与できる従順な子どもたちを育て続けてきました。そこでは「個人それぞれの能力」こそが問題視され、「学び」はより一層「個別化」されてきました。その一方、そうした流れになじめない子どもたち（不登校・発達障害などと名付けられた子どもたち）は、その個（子）の中に課題があるとされ、レッテルを貼られ、学びの場所さえ切り離されました。

そもそも「民主教育」それ自体を問い合わせたうえで、桜井智恵子先生は「反開発主義」を掲げます。成果や能力が強迫的に求められる社会で、自己責任と競争から逃れる道を、私たちに提示してくださることでしょう。「ポンコツ」こそがこれからの生き方なのだ、という先生のお話から、様々なことを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

2月15日(日) 13:30-17:00 (受付開始 13:00) 富士見文化会館 101号室

Ed.ベンチャーの学習会のお知らせ

3/21

(土曜日)

外国人の子ども理解の学習会

事例研究会

大学院生の論文検討

15:15~17:15 学校でのフィールドワークから外国
ルーツの子どもの相互作用と学校
オンライン

★オンライン参加の方は、学習会の前日21:00までにご連絡ください。
連絡先: toiawase@edventure.jp

3/30

(月曜日)

授業研究会

卒論報告

(教員になる前に確認しておきたいこと)

- 公立小学校の資源配分の違いと力のある学校の運営の検討—包摂の観点を組み込む
- 親の離婚を経験した子どもの意見表明の実態—家父長制と性別役割分業の視点から

「Ed.ベンだより」リニューアル

2026年2月号から、Ed.ベンだよりは新しいレイアウトでお届けしています。このリニューアルは、長く読み続けてくださっている会員の方からの「中身の濃さにふさわしいレイアウトにしてはどうか」という提案がきっかけでした。72号より、その方ご自身の手によるレイアウトを採用しています。実はこのレイアウトには、いくつもの意味が込められているそうです。その背景については、またどこかの号で紹介できればと思います。副題の「教育の現場から、時代を読み解く」、「力と意味の狭間に立ち、考え続ける」という言葉にも、Ed.ベンだよりが、いま社会に届けたい思いがじんでいるように感じます。